

### 「なぜ泣いているのか」

イスラエルとアメリカによるイラン攻撃から一ヶ月以上が経ちました。この間、メディアで度々報じられてきたのは、政治家や軍事関係者が、神やイエス・キリストの存在を攻撃の正当化や戦意高揚に利用する様子です。国防長官が国防総省（ペンタゴン）で行われた礼拝で「(神の) 慈悲を受けるに値しない者たちには、圧倒的な暴力を加えよ」と発言したとも伝えられています。

同じキリストを救い主として信じる一人として、ここまで恣意的に神の名を用いて良いものかと思えます。「地よ、主である方前で身もだえせよ。／ヤコブの神の前で」(詩編 114:7)と詩人は歌います。神の思いを都合良く解釈するのではなく、ただ神の言葉として受け止め、神の前に沈黙せよと呼びかけています。私たちに必要なのは自己を正当化する雄弁さではなく、神の前における沈黙なのです。

だからパウロは「神の恵みによって、今の私があるのです。……しかし、働いたのは、私ではなく、私と共にある神の恵みなのです。」(コリントの信徒への手紙一 15:10)と、手の働きを誇らず、神の恵みを誇りました。自己正当化のために神を利用することなく、沈黙して神の思いを受け入れたのです。

また、沈黙は、聖書を恣意的に読むことの危険性を浮き彫りにします。誰も、自分にとって都合の良い世界で生きたいと願っています。できることならば、(少なくとも)自分だけは得をしたい、と。だから、聖書の言葉も「良い言葉」だけを切り取りようとしてしまうのでしょうか。このような状況を危惧して、ローマ教皇レオ 14 世は、3 月 29 日の礼拝において、「(イエスは) 戦争を起こす者たちの祈りを聞き入れず、拒絶し、『たとえあなた方が多くの祈りを捧げても、私は聞かない。あなた方の手は血にまみれているからだ』と言われる」とイザヤの言葉(イザヤ書 1:15)を引いて、警鐘を鳴らしました。

もちろん、この引用もまた恣意的だと言うかもしれません。けれども、イザヤの言葉には続きがあります。大切なのは文脈なのです。「洗え。身を清くせよ。／あなたがたの悪い行いを私の目の前から取り除け。／悪を行うことをやめよ。善を行うことを学べ。／公正を追い求め、虐げられた者を救い／孤児のために裁き、寡婦を弁護せよ」(イザヤ書 1:16-17)。今、行われていることが果たして「善」なのか、自らの胸に手を当てて考えてみなさい。虐げられている者を一層虐げる行いではないのかと問われています。

なぜなら、イエスが復活されたのは、「私は目の見えない人に知らない道を行かせ／知らない道を歩かせる。／……暗闇を光に変え／起伏のある地を平らにする。／……彼らを見捨てない。」(イザヤ書 42:16)とイザヤが語るように、虐げられている者、この世で労苦を負っている者たちに光を与え、困難を少しでも少なくするためだからです。格差を拡大するためではなく、全ての者が平和に生きるために復活されたはずなのです。それゆえ、レオ 14 世は「これがわれわれの神、平和の王イエスだ。イエスは戦争を拒絶される。誰も戦争の正当化にイエスを利用することはできない」と訴えたのです。

マグダラのマリアが探したイエスもまた、彼女にとって都合の良いイエスだったのかもしれませんが。自分の人生を肯定してくれる、自分だけを見つめてくれる存在としてのイエスを探したのかもしれませんが。彼女の目が涙に溢れていたのは、そのイエスを見つけることができなかつたからでしょう。そして、その涙に溢れた目には、復活されたイエスの姿は映りませんでした。

天使たちが、そして、イエスが、「女よ、なぜ泣いているのか」(ヨハネによる福音書 20:13、20:15)と問われたのは、もちろん、「もう涙する必要は無い」と言うためです。それだけではなく、自己正当化できないことを嘆くのではなく、涙を拭いて、全ての者の平和のために復活された真実のイエスの姿に目を開かれなさいという呼びかけでもあります。マリアはその呼びかけに応え、平和の主イエス・キリストを伝える一人へと変えられました。

この混沌とした現在にあって、私たちが厳しい現実には涙溢れそうになります。そのような私たちにもまたイエスは、「涙している場合ではない」と呼びかけられています。今こそ、涙を拭いてしっかりと前を向いて、復活のイエスと共に、平和への一步を踏み出す時なのです。

